

表3 逆懸垂位での頸部・軀幹の伸展の有無(11, 12, 13カ月児)

		頸 部		軀 幹	
		伸展なし	伸展あり	伸展なし	伸展あり
11カ月	腹臥位	8	9	9	8
	背臥位	7	10	8	9
12カ月	腹臥位	20	22	22	20
	背臥位	24	18	28	14
13カ月	腹臥位	5	6	5	6
	背臥位	4	6	5	5

表4 泣いている時, 泣いていない時での頸部・軀幹の伸展の有無(11, 12, 13カ月児)

		泣いている時				泣いていない時			
		頸 部		軀 幹		頸 部		軀 幹	
		伸展なし	伸展あり	伸展なし	伸展あり	伸展なし	伸展あり	伸展なし	伸展あり
11カ月	腹臥位	3	7	3	7	5	2	6	1
	背臥位	5	6	5	6	2	4	3	3
12カ月	腹臥位	11	11	13	9	9	11	9	11
	背臥位	12	11	13	10	12	7	15	4
13カ月	腹臥位	0	3	0	3	5	3	5	3
	背臥位	1	2	1	2	3	4	3	4

### 3. 乳児期早期における脳障害児早期発見に関する研究

#### (1) Brazelton 新生児行動評価尺度の胎齢に伴う変化

九州大学医学部小児科教室

南 部 由美子  
黒 川 徹  
高 木 誠一郎

1973年Brazeltonは心理学的行動評価を主とした新生児行動評価法 neonatal behavioral assessment scale を発表した。これは神経学的所見のほかに habituation, 見当識, 運動, 興奮性, なだめられ易さなどの行動を観察することにおいて画期的なものである。われわれはこの scale の胎齢による変遷, 予後との関連について検討し, 報告した。

対象は, 九大小児科に入院した未熟児159例と九大産科にて生まれた正常成熟児11例である。表は未熟で生まれ, 胎齢40週になった新生児と40週で生まれた胎令40週の成熟新生児を比較したものである。行動 score に有意差があったものは\*印で示してあり, 無機音への見当識反応, 易刺戟

表、胎齡40週における行動得点

	Pre- mature	Full term
1. Response decremet to light	6.9	7.8
2. Resp.dec.to bell	7.1	6.8
3. Resp.dec.to pinprick	3.8	5.8
4. Orientation inanlmate visual	2.6 *	2.7
5. Orient.inan,aditory	4.6	3.9
6. Orient.anmate visual	1.8	2.2
7. Orient.anmate auditory	4.1	4.0
8. Orient.anmate visual & auditory	3.3	2.5
9. Alertness	4.1	4.3
10. General tonus	4.0	5.1 *
11. Motor maturity	3.7	4.2 *
12. Pull-to-sit	4.0	3.6
13. Cuddliness	4.1	4.5
14. Detensive movement	3.5	4.7
15. Consolability	5.3	6.9 *
16. Peak of excitement	6.0	5.3
17. Rapidity of buildup	4.5	3.6
18. Irritability	4.2 *	2.6
19. Activity	5.3 *	4.2
20. Tremulousness	4.3	5.1
21. Startle	4.1	4.6
22. Labidity of skin color	4.7	5.2
23. Iadidity of states	3.4	3.6
24. Self-quieting activity	7.5	8.2
25. Hand-mouth facility	4.9	5.5

四肢運動の活発さは未熟児の方が高値を示した。全身筋トーン、運動成熟度、なだめやすさは成熟児の方が有意に高値を示した。

光に対する反応抑制は胎令と関係がなかった。胎令と関係なく3~6回の刺戟で反応がみられなくなる。

無機物に対する視覚的見当識反応は胎令31週から32週にかけてわずかな上昇がみられた。すなわち刺戟で鎮まる2点からちらっと焦点を合わせる3点に上昇した。

人の声に対する見当識反応も胎令31週から32週にかけて上昇がみられた(図1)。他の無機物に対する聴覚反応もそうであり、胎令31~32週は睡眠・覚醒がはっきりする時期でもあり興味もたれる。

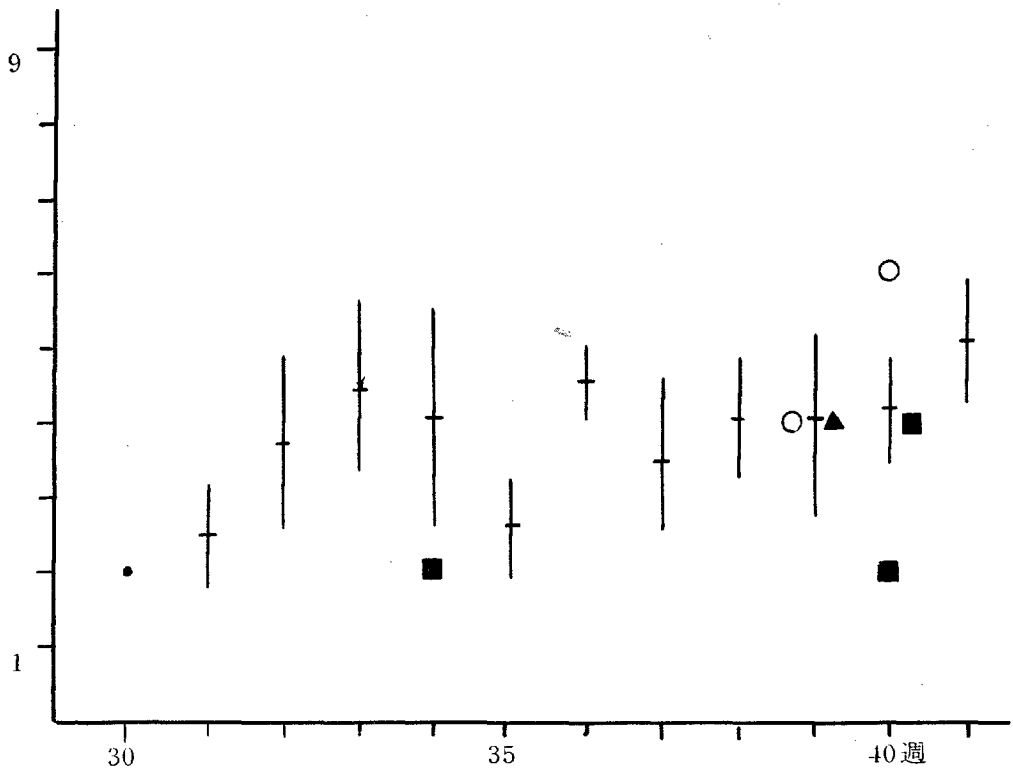


図1. 人の声に対する見当識反応の胎齢に伴う変化

全身筋トーンスはぬいぐるみ人形のような状態が1点。検査中トーンス亢進の%の占める時間の割合によって示す。トーンスは受胎後週数が進むにつれて上昇する傾向がみられた。

運動の成熟度も歯車様のギコチない、また jerky な動きが、滑らかな動きとなり、胎齢とともに成熟している。

引き起し座り反応は受胎後週数が進むとともにわずかに上昇した。測定評価時の児の状態はstate 3 から 5 の間が良く、睡眠時では低く、啼泣時には高く出る傾向があった。すなわち肩にわずかに力が入る程度から、腕にも力が入り一回首が固定される程度まで発達する。

防禦運動も受胎後週数とともに発達し、31~32週では3点すなわち布を顔にかぶせられて長時間経過後反応したが、33~34週ではすぐ反応し、満期に近くなると rooting や頭を横にふる防禦反応がみられるようになる。(図2)。

手口の容易度も胎令とともに変化発達する傾向がみられた。すなわち胎令31週では1点で口に手をもっていこうとせず、33週では2点で口の辺りをちよっと拭くか実際には触れなかった。36週では3点で口に触れた。39週では2回触れて4点、40週では3回触れて5点というように上昇して

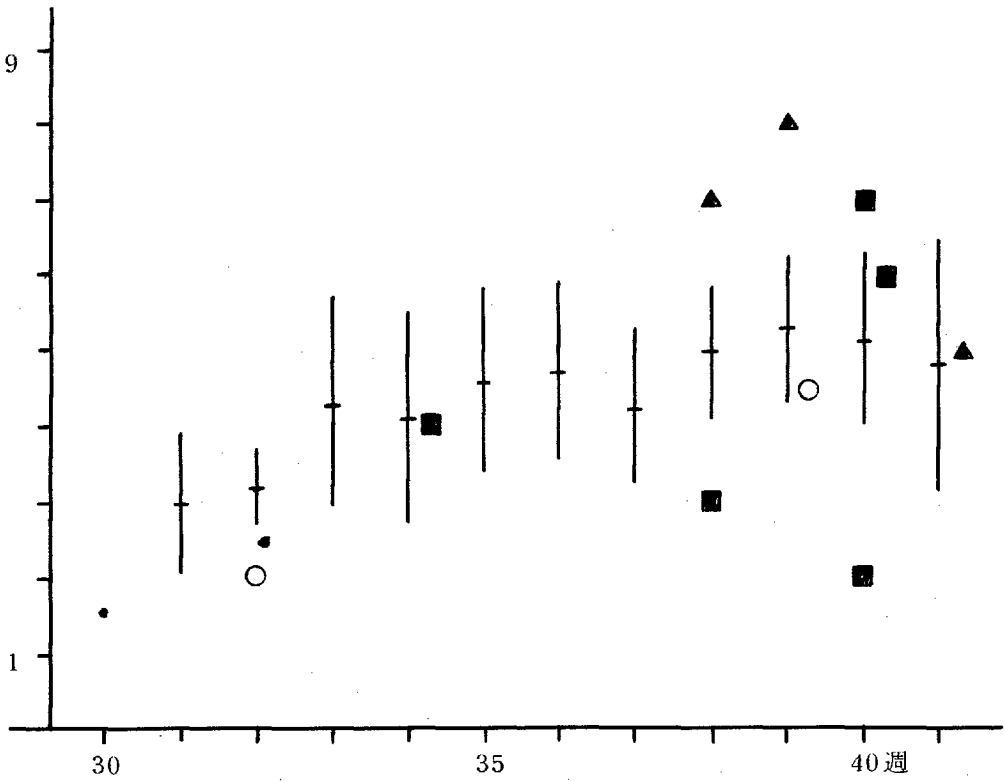


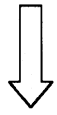
図2 防蹙運動得点の胎齢に伴う変化

いる。

以上がBrazeltonの行動評価尺度のうち胎令とともに点数が増加する傾向を示した検査項目である。すなわちわれわれが行なった25の検査項目のうち全身筋トーン、運動成熟度、ひき起し坐り、防蹙運動、手口容易度の5項目のみであり、他の抑制反応、見当識反応、覚醒度、興奮頂点、皮膚色、状態の変化のし易さには胎令による変化を見出すことは困難であった。

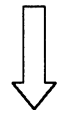
## 文 献

Brazelton, T. B.: Neonatal Behavioral Assessment Scale. Clinics in Developmental Medicine, No. 50. Spastics International Med. Publ., William Heineman, London, 1973.



## 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



1973 年 Brazelton は、心理学的行動評価を主とした新生児行動評価法 neonatal behavioral assessment scale を発表した。これは神経学的所見のほかに habituation, 見当識, 運動, 興奪性なだめられ易さなどの行動を観察することにおいて画期的なものである。われわれはこの scale の胎齢による変遷, 予後との関連について検討し, 報告した。